
ノイトロバ

衛藤モモーロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノイトロバ

【Nコード】

N6672N

【作者名】

衛藤モモロ

【あらすじ】

二人だけの帰り道、群青色の空の下には見知らぬ少女が立っていた。

少女を預かる事になった有紗、思いを寄せる拓斗、二人は同時に彼女の理想や我儘に吸いこまれていく

息の槍

教室がざわざわと。

それはまだ新品の噂話が流れたからである。

しらしいし白石有紗。彼女は普通といっても、普通じゃ無いような。

でもでもごく普通のなんとも言葉にしにくい中学生である。

彼女にはずっと恋焦がれていた相手がいる。

しまや島谷拓斗である。彼を思う気持ちは、誰よりも強いと。

彼女は誰にも言わずにひそかに感じていた。

有紗は六年半くらいだろうか。

拓斗の眼を見るたびに胸がねじれるような思いをしてきた。

「え？何なのこの騒ぎー」

「うわー、なんか意外な組み合わせだよね」

「そうかなあ……小学校のころは仲良かったみたいだよ、幼馴染か
と違ってたもん」

それは昨日の事だ。最近、有紗の機嫌はかなりいい。

じわじわと2人の距離は縮まってきているからである。

もう拓斗が有紗を好きなのは有紗も理解しているが、

素直のつもりで、でもなんだかいけない気がして、

まだ有紗の気持ちを伝えてはいない。でも、とても仲良くさせても
らっているし、

周囲から見たらまあ、それなりに見えるかもしれない。

それでこのありさまだ。

「うわ……来たよ」

「ねえねえ、白石さんあの噂ほんとうなの？」

一番後ろの席。鞆をどすんと置く。

バタバタと座る。無表情のまま、人形のように。

チャックを開けた時だ。

「噂……？」

頭を若干傾けた。

あまり絡んだ事のないクラスメイトに声を掛けられて動揺したのと、思い当たる節がすぐに浮かんで恥ずかしいのだ。

もちろん、聞きかえしたのはわざとである。

「島谷のことだよーう。噂、ほんとなんでしょう？付き合ってるんですよ？」

「え……付き合っては無いよ」

「ふああー、よかった」

話を聞きに来た女子のうち一人が大きな息を漏らした。

有紗の心臓には、やわらかい息の音がぐさりと刺さった気がした。

「よかったねえ、まゆ」

「うんっ、島谷くんの事好きだもん！白石さんに取られてたら泣き崩れてたかも。はははっ」

そう言って女子の群れは去っていった。

彼女たち、気付いただろうか。私が”付き合っては無い”と言ったのを。

どうせにしろ両想いなのだけだな。

そんな言葉は刺さった気がしたものと一緒にして飲み込んだ。

息の槍（後書き）

はじめまして。恋愛系頑張って書いていこうと思ってます。
最初に書いた話などはもう書き飽きてしまって、ずっと放置してお
ります。

結構飽きっぽい性格なのです。ノイトロバは一応話を最後まで考
えておりますが、

途中であきないといいのですがね……。

群青色と恋敵

だから昨日は一緒に帰った。

有紗は部活なんてしてないのだけど、拓斗はテニス部だ。だから校門ですっと待っていたのだ。

下校中の生徒のほとんどが、こちらを振り向く。

その視線が痛くて痛くてしょうがなかったのだ。あとちよつとで泣きたくなるくらいだった。

「ごめん、おまたせ」

「あ……よかった」

どうせ家は校門の前、すぐ行ったところの住宅街なわけで、わざわざ一緒に帰る必要がない。

だからこそ2人こうしてならんでいるわけだが。

もう空は群青色に染まっていた。

有紗の頬は桃色だ。いつでも頬は桃色だが、今はそれ以上。

なんで並んで歩いているのだろう、そんな事を考えると拓斗の顔なんて見れやしない。

「あ、じゃあ俺……こっちだから」

「うん、知ってる……」

「ええと、帰るから」

「うん、察してるよ」

「……バイバイ」

「はい、また明日……」

その夜、さっきのやりとりについて考えていた。

なんだかとても幸せな状況にいたのに、もったいないことをした。お互い照れ合っているのだろうか、なんだか寂しい感じがする。でも、その後の言葉が嬉しかったのだ。

「明日もできれば待っててくれる？明日は部活なるべくぬけだして

くるから」

「いいよ。待ってるから部活してきなよ」

「いやあ、用事あるかもしれないし、いつそのこと休んじゃおうかな……あ、ええと明日」

甘酸っぱい恋というのはこういうことをいうのだろうか。

初々しいのがよくわかるが、ぎこちなさすぎて考えるとイライラしてきた。

しょうがない。素直なようで素直じゃない。

なかなか素直な面を出せないのだ。あの流れで思っただけでも伝えておけば。

群青色の空が妙にきれいであつたな。まぶたが重くなってくる。

「今日は寝よう……明日もいいこと有るといいな」

そして今朝である。”いいこと”よりも悪いことのほうがさきにくてしまったようだ。

恋敵を発見。でも、どう見てもまだ自分のほうがかっつる気がする。

山田真由やまだ まゆさんはあまり性格がいいという話を聞かない。

自己中心的で、うるさくて、まあいわゆるお節介さんな訳だけど、人によってはうけるかもしれない。

ルックスは……背は若干高めである。

きつと拓斗より高いだろう。それならば並ぶときにまだ拓斗より低い有紗のほうが綺麗に見える。

顔……有紗と真逆でそれはそれは大人っぽい。

山田さんには負けぬよう、頑張らなくてはならない。

でも、そんなこと有紗はどうでもいいと、他のことを考えていた。

今日も群青色の空で顔の赤さを隠し、気まずいけど気持ちのいい時間を過ごすのか。

あの群青色は本当にきれいだ、と

少女

有紗は、拓斗と一緒に帰る時間より、最近群青色の空の下を歩く方が好きで、

もちろん拓斗も好きだけど、その色に惹かれるものがあったのだ。だから拓斗と一緒に帰ってくれなくなっても、ずっとこの空の下を歩こうと思っていた。

どうせいつかはそんな日が来るだろう。

「あたしさあ、この空の色好きなんだよね」

「えっ……俺も」

ふともらした言葉に、拓斗がのっかる。

まだ部活をしているところもあるのだろう。

じわじわと残る掛け声。でももうこんなに暗いのに。

「なんか綺麗だね」

「うん……でも俺はこの色より有紗が好きだよ、いろんな意味でな」

「えっ……」

ちよつとした言葉でこんなにポロリと皮が剥げ落ちるのかと。

拓斗はすぐに下を向いた。見てはいけないと思ったから、有紗も左を向く。

二人の足がピタリと止まる。

これは拓斗も立ち去りにくいだろう。

ちようど拓斗の家の前である。有紗の家はまだ先の先くらい。

「あ、あたしもこの空くらいに拓斗が好きだよ。いままでずっと仲良くさせてもらったし」

「うん。一瞬今の失言かと思った」

「いやいや」

足が動かずにいたから、有紗の方から手を振った。

そしたら拓斗も手を振って、いつものように明りのとまった家に帰って行った。

自分の家の方へ向いた時だ。有紗の家の手前に、小さな少女が立っていた。

まだ小学生前後であろう。そのくらい幼い少女が、こんな時間に一人で立っていたのだ。

そのあまりにも見たことのない情景に、一瞬有紗は幽霊かと見間違えてしまった。

半歩後ろにさがったものの、少女はこちらに気付いたようで、にっこり笑って寄ってきた。

「……」

少女の大きな瞳は街頭の明りでキラキラとしていた。

なんだか懐かしい顔をした少女に、有紗はいった。

「どうしたのかな……？こんなに暗いのは何してるの？」

有紗は小さな子供が大好きである。

近所の子供等が遊んでいるところを見ているととてもほほえましい。でも、子供子供とした4〜8歳くらいまでの子供は苦手だ。

いいお姉さんすぎて、自分を独占されるのが嫌いなのだ。

たいていこのくらいの年齢の子は慣れればいつまでもすり寄ってくる。

できれば0歳〜3歳くらいがお望みだ。一生で一番かわいい時期だろう。

「そっちこそナニしてるの？もうまっくらなのに」

「お姉さんはね……今学校から帰ってきたの」

ああ、声といい、この喋り方といい、後日絶対に付きまとわれると有紗は悟った。

少女はそんなことを思われているとは知らない。

むしろ、とてもワクワクとした浮いた気持ちでいた。

何かに期待していたのだ。

「学校こんなにおそいの？」

「ううん……お姉さんはもう終わってたんだけど、お友達を待って

たの」

ふうん。と行った後、少女は手に持っていたぬいぐるみを有紗に渡した。

ブタのぬいぐるみだ。こんなに小さな子だったら、普通はうさぎやくまのぬいぐるみを好むだろう。

何故ブタなのだ？可愛くない事も無いがやっぱりうさぎのが有紗は好みだ。

「その子ね、リカちゃんって言なんだよ。おねえさんにあげる」

「え……ちよっ」

ブタさん、リカちゃんを返還しようとしたら、少女の姿は消えていた。

ずいぶんと運動能力に優れた子なのだろう。

気がつけば空は群青色よりもさらに暗い青色になっていた。

リカちゃんを抱いて、有紗は鍵を握った。

第四章

「へえ、そんで返せないままアリちゃんは持つてるワケだあ」

「そうそう。ほんとどこの家の子だったんだらう。あの時間からして近所の子だと思うんだけど」

有紗はいつものように前の席の子と話していた。

にしむら かなえ
西村佳苗。幼馴染だった。

短くてサラサラな髪の毛をすばやくはらうと、佳苗は鉛筆を左右に振りながら言った。

「あの近辺にそんな子みたことないんだけど？」

「んー、どっか遠くから来た子なのかなあ」

「髪がすごく長くて、小学生前後でえ……佳苗、そんなの見たことなあい」

そっかそっかと笑って、有紗はシャーペンを握る。

彼女の趣味は、ノートのはしっこにどうでもいい落書きを見事に施すことである。

授業中はいつも暇つぶしとして絵を描いている。

それなりに絵は上達したものだ。とても美術の時間に役立つようなクオリティでもないが。

「今日部活も休みだし……女の子探しにいこっかな」

「え、探すんなら佳苗も一緒にいいかなあ？ちっちゃい子って見ると和むんだよねえ」

もちろん、有紗は了承するとさっそくそれを告げる。

今日の3校時眼は美術の時間だ。移動教室だ。

となると、隣の席は拓斗に決まっている。

今日は一緒に帰れないから。

スケッチブックのはしに薄く書いて指をさした。

「なんで？」

小声で拓斗が言う。

声に出しては周囲に聞こえるし、先生に怒られてしまうのに。

有紗は再びスケッチブックのあきのスペースに、忘れ物あずかった女の子をさがしに。と書いた。

「あっそう。で、誰？」

「えっと……わかんない。けど近所の子だろうと思う」
字を書くのは早くない。

口で言った方が早い。

有紗はさっき書いた文字を消しながら言った。

放課後の

「まず、公園でも行こうか……」

有紗と佳苗はさっさと制服から着替え、家を飛び出した。

中学生になって放課後に遊ぶ機会はほとんどない。

部活や勉強で忙しいからではない。面倒なのだ。疲れてしまう。

もう一度家に入れば、再び外に出る気力がない。

制服を着替えるのだって面倒なくらいだ。

「公園ねえ、どっちのがいいかな。向こうの第三公園か、ハト公園か」

結局近い方から行くことにした。

だいぶ涼しくなってきた。

木漏れ日からの光は、風のせいで温かいとは感じない。

ハト公園に、あの少女らしき女の子はいなかった。

「あの子じゃないのお？」

「いや、違う。あんな子じゃない」

あの少女の顔はなんだか懐かしいにおいのする子だったのだ。

昭和っぽい顔とか、そういう意味じゃなくて。

どこかで見たことあるような。いや、しょっちゅう見ていたような。

でも、暗い中で見たわけだ。顔なんて覚えてない。

「でも、そろそろ6時になるよ？」

文字盤の針を見る。

確かに今は5時47分。そろそろ小学生たちは家に帰るところだろう。

小学生だった有紗と佳苗の門限もこのくらいだった。

6時までには家に着かなければ閉め出される。弟にはなかった一つの決まりだ。

「あ……そうだね。意味無いから今日はやめにしようか」

帰り際に気付いたのだ。

大事なりカちゃんを持ってくるのを忘れた。

これじゃあ見つけたって意味が無い。

でも、佳苗は言ったのだ。

「んー、でもみたのは夜なんでしょ？もっとね。だったらその時間にまた探したらどーお？」

そうだねえ、と有紗は言ったが、結局空腹には耐えられない。

佳苗はさっさと帰ってしまった。

だいぶ空気も冷えてきたもんだから、家の前でも待ってようかと思っただけど空の色が暗くなり始める前に家に帰った。

明日は絶対に忘れぬようにしよう。

玄関に置きっぱなしだったリカちゃんの頭をなでながら言った。

確信へと

今日も変わらぬ朝が始まった。

いつものようにゆっくりと朝食とシャワーを済ませた。

それから長く、量の多い髪の毛の湿り気と、時間との葛藤も済ませた。

これだから毎日のように友達とも待ち合わせに遅れるのである。

だってしょうがないではないか。昨日は頭痛に襲われ入浴なんてできなかったのだから。

悪化するわけではないが、入る気がしなかったのだ。

でも綺麗なものを見た。今日の夜明けすぎだろうか。

青い空に白い雲、雲には日の光が映りこみ桃色になっていた。

桃色と言っても朱味あかみを帯びたもので、それはケチャップとマヨネーズを混ぜたような色だった。

本当に群青色の空と同じくらい美しいものだった。

「へーえ、よく起きれるよね。というか、そんな早起きしてるのにそんなに遅れちゃうの？」

佳苗は両腕をばたつかせながら言う。

重たい荷物を片手に持ち、その荷物ごとブンブンと。

「いやあ、なんか最近寝てる途中で目が覚めるんだよね。夜明けぐらいに。二度寝したから」

落ち着いた声でそういうと、重たそうに体をかたむけ荷物を背負う。

教室に入れば、荷物をこれまた重たそうにどすんと落とす。

ここに座ってもまた佳苗と一緒にである。くじでたまたまそうだったのだから。

いままで結構長い付き合いだったと思うが、こう毎日長時間一緒にいると飽きてくる。

なんとなく解らないだろうか、少し距離を置いた方が居心地がいい。

一日中一緒にいても飽きない人間は、ごくわずかしいない。どちらかと言えば、積極的に喋ってくる方よりこちらから離しかけて仲良くなった友人のほうがいいのだ。口数の少ない有紗にとってその存在は希少価値なものであったが。

佳苗は色々な昔の話をしてくる。

たとえば、幼稚園時代の話とか。

ほとんどの場合有紗の記憶の方がついてこれてないが、共感してほしいとおもうネタほど佳苗は知らない事が多い。

たとえば、クラスの竹中くんたけなかの弟がうさぎに指をかまれたとか。

「だって佳苗違うクラスだったじゃん。たんぽぽぐみだったでしょう？ 佳苗はすみれぐみだったよ」

あー、そっか。そんな会話を数ヶ月後にまたすることがある。

もちろん他の幼馴染と話すことだってあるが、唯一クラスが一緒なのは佳苗だけなのだ。

「そしてさーあ、アリちゃんの落書きまねしたけど……あ、後ろ後ろ」

佳苗に言われて有紗は後ろを振り向いた。

少し不気味に拓斗が立っていた。

どうしたのかといつものように訊いた。とはいえ、自然体ではなく少し固まって。

「えっと……今日さあ、一緒に帰れる？」

「え……ちょ……」

教室でどうどうと言われてしまった。

もちろん、他の生徒のざわめきであまり外には聞こえなかった。佳苗以外には。

「ねえねえ何の話ー？」

「え……」

ここでもうやく拓斗も気がついたようだ。

本当に解りやすい物で、みるみるうちに顔が赤く染まっていた。

佳苗はもうわかりきった顔で微笑んでいる。

有紗は自分だけでも平常心に、頭を回転させてなんとか言い訳を思いついた。

「えっと、女の子一緒に探してもらおうと思って」

「ふうん、どうして？ 拓斗に関係が？」

えっとねえ、そのー……だってねえ？

何の話をしているのか拓斗には解っていないだろうが、有紗は必死に同意を求めた。

戸惑いながらも首を上下に振った。

「女の子とあった日にたまたま道で一緒になってね、別れた後に女の子が……」

「はいはい、あいにくだけどアリちゃんは早苗がもらうからあ」

え、と小さな息を漏らした。

有紗の腕はぐいっと佳苗の胸に押し寄せられ、拓斗はまだガチガチのままであった。

ニコニコと笑い佳苗は腕をひいていく。

「手洗いに行くよ、アリちゃん」

「ええ……ちよっおま」

2人の後ろ姿をただ茫然と拓斗は眺めていた。

なんだかグサリときた。

あの2人の態度。なんだかおかしい。

ああ、そうかあと確信した。

有紗と佳苗の性格からしてきつとそうに違いない。

1つの考えが大きく刻まれると同時に、小さな力を背中に感じた。

「ねえ……何の話だったの？」

「いや、なんも」

山田真由は心配そうな顔をして拓斗を見た。

拓斗は何もなかったかのように席に着いたが、すこし名残惜しそうな顔で山田真由は立ち尽くしていた。

冷たいアスファルト

昨日の放課後も、やはり少女の姿を見る事は出来なかった。

もうどうせなら、ばったり会ったときなんか家にきてもらって渡せばいいか、なんて。

見たことが無い少女を探すのなんて、難しいかもしれない。

佳苗は有紗以上にやる気だったが、そんな事を思い始めたころである。

「ねえ」

「……なに？」

さっそく、朝のH R前にこの事を拓斗に言っておこうと思った。

昨日無理やり佳苗に連れ去られちゃったから、詳細や謝罪の言葉まで言い忘れた。

まだ先生が教室に来るまでには時間もあるし、山田さんの姿も見えない。

「昨日はごめんね。急に佳苗がひっぱっちゃうからさ」

「あーうん」

いつもは元気いっぱい少年なのだ。

でも、今日は拓斗の表情が晴れてはいない。

何かあったのだろうか。あまり長話はしない方がいいと思った。

「今日は帰れるから」

「うん、解った」

あとは帰る時にじっくり話せばいいや。

有紗は席に戻った。

こんどは佳苗までもが曇った顔をした。

「んもう、そんなに拓斗が好きだったの？」

「どうして」

内心かなりのダメージである。

今まで長い間、拓斗が好きだということは誰にも言っていないのに。

小さな小さな、それは小さな爆弾を一つ投げ入れられたようだ。

それでも、彼女は落ち着いた態度を見せる。ここで焦っては。否定をしなければ。

「いやあ、だって昨日の言い訳嘘っぽかったんだもん。でも、まあ信じるよ。というかいちいち謝らなくなつていいでしょう」

「でも可哀想じゃん。こっちから探してほしいってお願いしたのに」

佳苗はぶるんぶるんと首を振って

「いや。好きでもなんでもないんだったらいちいち構わなくていいのっ」

これは消して有紗に対しての嫉妬心ではない。

佳苗はこういう人なのだ。すこし自己中心的なところがある。

まあ、確かにまわりは佳苗を中心に動くから、そういう性格になつてしまうのは仕方がないのかもしれないが。

そして放課後である。

空はいつもより早く色を染める。

そろそろ衣替えの時期である。

夏服になったばかりの時はまだ肌寒い。冬服に変わる前まで肌寒いなんてどうかしてる。

いつものように校門で待っていたのだ。

やがて、拓斗と同じ部活の人たちが校門から出てくるのが見えた。

そろそろ来てくれるだろう。まず、少女探しの詳細について何から述べようか。

頭で色々考えながらも、久しぶりに一緒に帰るもので心はワクワクだ。

だが、どれだけ待っても拓斗の姿はない。

どうしたのだろう。だんだん心配になってきたが、なんとなく経験から裏切られて先に帰ったのではないかと疑い始めた。

まさかそんなことはないと思った。だって、帰れないと言った時、なんだか少しさびしそうだったからである。

「あ……」

その表情、今朝の表情によく似ている。

今日は一緒に帰れると告げた直後の拓斗の顔。

その時の顔と同じだった。これはおかしい。首をかしげた。

きつともう帰ってしまったのだ。有紗は淋しいながらも帰り道を歩いて行った。

ほほをさす空気が冷たい。寒いのはこの夏服のせいだろうか、それとも一人のせいだろうか。

どちらかではない。どっちもだ。

暗いアスファルトに吸い込まれるような気持ちで有紗は歩み始めた。

庵

とても暗い気持ちでいた。

やっぱり佳苗に手を引いて行かれたあの事を怒っているのかもしれない。

それとも、その前の帰れなかった時のことも？

これからどうしよう、不安が背後で渦巻く最中、あの少女がにんまりと笑って近づいてくる。

「あ……こないだの」

有紗は手招きをした。

少女は元気いっぱいにこちらへはねてきた。

街頭の下に立つ。本当に懐かしい香りの少女だ。

「えっと、このあいだの忘れもの……あ、家だからちょっとついてきてくれる？」

おそい時間であったが、早くあれを渡さなくてはという衝動のほうが強かった。

なんとなくだけど、これを手渡せば拓斗がまた帰ってくれると思ったのだ。

ただ、気まぐれで帰ったのかもしれないけれど。

「ここで待ってて、すぐとってくる」

玄関の前に少女を立たせて、有紗は家の中へは行って行った。

ああ、扉を開けたら少女が消えているかも。

すぐに見えなくなっちゃうほど足の速い娘なのだ。

玄関の棚に置いてあるリカちゃんをゆっくり握った。

少女は大人しく待っていた。

とてもまるく美しい瞳でこちらを見上げている。

小さなブタの人形、リカちゃんを少女に帰してあげた。

でも、少女はそれを拒否した。

「わたしあげるっていったんだけどな」

「え……でも、あなたのものでしょう？　いらないの？」

少女はうんうんと頷いた。

ちよつと困ったが、せっかくなのでもらっておく。

一応気になっていた事を聞いてみた。

「えっと、お名前は？」

「いおり、わたし庵^{いおり}」

庵と名乗るその少女は何かを訴えるような眼で有紗を見つめる。

きらきらと瞳の中でゆらめく街灯の光。

有紗は察した。

「あたし、白石有紗。ありさよ、有紗」

少女は口を半分開けてうんうんと頷いた。

名前わかりましたよ、ということだろう。

でも何かいいたげな顔だ。でも何も言おうとしない。

人見知りをする子なのだろうか。

「おうちはどこなの？」

少女は口を開こうとしなかった。

一瞬家がないのかと考えたが、個人情報漏らさない主義なのかもしれない。

「わかった。じゃあ、えっと……時間大丈夫なの？」

「帰っていいと？」

急に少女の口調が変わった。

と思ったら、喋ったのは少女じゃなく、人形のほうだった。

庵と同じ声でしゃべる人形……。

「えっ……」

一瞬何なのかわからなかったが、あきらかにリカちゃんだろう。

さつきからむず痒いと思ったら、身ぶり手ぶりで喋っていたのだ。

「やっと気付いたんね、庵の声はこのリカちゃんがアフレコしてたんよ」

え、あの……と少々引き気味に有紗が喋る。

リカちゃんは満面の笑みである。ドッキリ大成功みたいなの。

「この子が私をあんたにあげるっていいよるんよ。やけ居候させてもらうけ！大丈夫、一応ぬいぐるみやけ場所とったりもせんし、エサもいらんよ？」

「え……えっと」

気がつくともまた庵の姿はなかった。

またか、と思った。

なんだかこの変なしやべり方の人形を押しつけられてる気がしてならない。

「早く帰らんと、晩御飯の時間やろ？」

「そうですね」

わけのわからないまま有紗は家へもどっていった。

揺らぎの心

「よかったじゃん」

昨日の夜の出来事を、さっそく佳苗に報告した。

でもどんな子だったんだろう。

佳苗はきになるようでその子の特徴を色々と聞いてきた。

今日一日はとてもハラハラする。

だって、学校までリカちゃんがついてきてるのだから。

なんだろう、過去にこんなアニメを見た気がする。

喋る、生きているぬいぐるみを鞆に忍ばせて毎日学校に通うってやつ。

それほどハマったもんじゃないけど、周りの子たちは好んでいたな。

「あーあ、ほんとつまらんとこやねえ、学校ってのはさあ」

どこかの方言で喋る人形……変な人形だ。

有紗はリカちゃんに向かっていった。

「だから喋っちゃいけないって。バレたら先生に没収されると思うんだけど、とうかなんでついてきたの？」

「あー、もうしゃーしいやつやねえ。それはリカがかってにここに入ったからやろ？朝にちゃんと荷物確認線といけんよ。朝のおはようも言ってくれなかったし。それでもってねえ、夜中から此処におっ」

うるさいのでチャックを閉じた。

しゃあしいのはそっちではないか。

そろそろ放課後である。不安である……。

今日は一緒に帰ってくれるだろうか。また帰られてしまうだろうか。

今日はもう夕暮れのうちに帰ってしまおうと思った。

昨日もどうせいなかったのだろう。今日学校では一度も話しかけてくれなかったし。

やっぱり、嫌われたのだろうか。どうしてだろうか。

やっぱり根に持っているのだろうか。帰れなかった事を。でも、彼はそんな人ではなかった。

とてもやさしい人だったのだ。普段は意地悪だけれど。

明日は何か言ってみよう。もう帰ってくれないのか訊いてみよう。他に好きな人でもできたのだろうか。

そういえば、まだ自分のものにはしていなかったな。

ほとぼしるような独占欲じゃないけど、やっぱりさびしい。

そんな事を考えていたが、結局黄昏の幕を空は張る。

重い鞆を持ちあげて、ゆっくりと歩いていく。

今日は赤く染まったアスファルトだ。

いつかの自分の気持ちのように、純粹で朱色の切ない色だ。心にしんみりなんてそれはないかもしれない。

なんだか何も入れない領域を心にまいてしまったようだ。

なんだか口を開くのが嫌になってきた。

憂鬱なのだろうか。こんなことでそうなってしまふのか。

幼い自分を笑い物にしながら、有紗の長い影は揺れていた。

こんなことがあと数日続いたのだ

かわるとき

確信して可哀想な事をしたと思った。

彼女はそういう性格だからよくわかる。

よく自分に似ている。

小さな力を背中に感じた。振り返る。

そしたら山田真由がいた。

自分をかなり心配していたようだが、今の自分にはそんなものはいらない。

拓斗は一人になりたかったが、それほど深く考えるものでもないと思った。

有紗は友情の方を大事にするのかもしれない。

自分とは違う点の一つだ。

「ねえ、もう嫌いなのかもよ。有紗ちゃん」
「……」

山田真由の言葉はさらに拓斗を傷つけた。

席に着いたのに、わざわざ自分の席まで来てその言葉を吐いたのだ。そんなことぐらい察していたのに、他人からもそう見えるのだ。

そのとたん、急に悲しくなったけど腹立たしい気持ちでいっぱいになった。

有紗に向けてではない。佳苗に嫉妬しているのだ。

なんと情けない。そんなのを表に出しては逆に避けられるかもしれない。

幼いながらも彼の頭はよく動いていた。

「有紗ちゃんなんて忘れちゃいなよ。本人が嫌ってるのにまだすり寄るの？可哀想だよ」

こんな話をしていてもまわりは気付いていないだろう。

教室のざわめきは一層レベルアップしたもようで、よかった。

他の友人にはこのことはバレていない。

別に2人一緒になっていたわけじゃないけど、ふられたようなものだ。

「……そんなに好きだったんだあ、島谷くんて。あんなおとなしい子のどこがいいのか解らないけど」

「意外と明るいんだよ……優しいし、ごく一部にだけだけど」

そう見えるだけだって、山田真由は大腿で戻っていった。

有紗は結構我慢する部分があるとなんとなくわかっていった。

昔からよく一緒にいたりしたが、迷惑をかけても笑ってくれるだけだった。

自分が傷つくからきつと有紗は拓斗が嫌いな事を隠しているのだ。

そして佳苗が手をひいて連れて行った。

佳苗はすこしわがままでうるさい面もあるが、わりと友達思いでまわりによってくる子も多い。

有紗が自分を嫌っている事を知っていたからいつものよう、佳苗が勝手に走ったかのようにふるまって自然と遠ざけたふりをしたのかもしれない。

だったら今日から一緒に帰るのはやめよう。

そう拓斗は確信したのだった。

「ね、今日はさびしく一人で帰っちゃうのお？」

「……またお前か」

教室が狭すぎて荷物と机がぶつかる音がする。

ガッゴゴッ。その音で拓斗のまだ高くあどけない声はかき消される。山田真由は柔らかいほえみを見せた。

拓斗はそれに見向きもしなかったけど、ずっと笑っていた。無言で教室を立ち去る拓斗を見てちよつとがっかりした。

「なあーによ。アタシだって島谷君と楽しく帰ってみたいと思ったのに」

かわるとき（後書き）

ここからちょっと主人公は拓斗さんな感じです。

かいてるうちにだんだん自分の性格が人物に反映されますね。

すぐおちこんで考えすぎるところなんか、不自然ですが私はこんな人間なのです。ごめんなさい。

小説後半ではグロテスクシーンを書こうと思ってるのですが、最初のほうはよくある恋愛小説っぽくてまったく面白くないですね。

今後も面白くなるか怪しいというか、そんな確信は中々見えてきません。読んでくださってるみなさんありがとうございます。

第十一章

いったん、距離を置いてじっくり考えてみよう。

だから今日、有紗と話はしなかった。

そしていつもより早く教室から出た。

むりやり鞆を引きずって、本当に危ない物から逃げるように。

有紗は本当に運動神経がないから、追いかけてくるとは思わなかったけど。

校舎の裏側を回った。有紗の行動を見てみると、掃除のときなんかいつも窓を眺めていた。

残念ながら校門側の窓とは逆だから上から姿を見るなんてあまりないだろうけどもしものためだった。

拓斗はとりあえず家に着くと、荷物を投げるようにして置いた。

妹がびっくりし、母親に注意された。

本当に指がちぎれそうだったのだ。早くおもりを払いたかった。

次の日も、有紗とは口を利かなかった。

なんだか有紗も元気がないみたいだし、もしかして少しは自分のことを思っているのかも。

でも、他に元気をなくす原因なんていくつもあるだろうし、まだその確信が持てない。

そのかわり、山田真由はいつも以上にみなぎって、いつも以上に絡む回数が増えた。

向こうが一方的にのが多いいけれど。

「ねえ、今日の3時間目ってなんなの？こっからじゃよく見えないの」

教室の後方の黒板。残念なことに、拓斗の席からでも黒板に刻まれた白い文字は見にくかった。

彼の視力が悪いからかもしれない。あわてて眼鏡を取り出してみる。

紺色の淵の眼鏡。似合っていない事はない。

「えっと……国語かな」

「あつりがとおー、だけど近づけば見えるんだよねー。ヒヒヒ」
？

なんだろう、このすこし侮蔑されて恥ずかしい気持ちは。

あわてて眼鏡をとりだした自分は軽率だったのだろうか。

でも、近くから見てください。そう考えるのもそれだろう。

山田真由はそんな拓斗が可愛いと思った。

じわじわと胸にこみ上げる子の気持ち。

気持ちがいいけれど、口から何かが出てきそうな感覚である。

「うふふ」と、無意識に不気味な笑みを浮かべていた山田真由の顔は当然いつもとは違うものだった。

きつとあまりにも嬉しかったのだろう。拓斗と絡めたことが。

「ねえ、山田さん、ちょっといいかな」

「はい……なあに？」

山田真由の肩を軽くチョンと叩いたのは同じクラスの川辺陽かわべひなただった。

長い栗色のつやめいた髪が印象的な彼女は、申し訳なさそうに告げたのだった。

「やめたほうがいいよ、彼、参ってるみたいだし」

「へ？」

第十二章

「どうしてよ」

山田真由は一步川辺陽に歩み寄ると大きく背伸びをして見せた。嗚呼、言うんじゃないかと陽の顔は後悔のいを出青ざめていった。小さくいっぽ、川辺陽は下がった。

魅力的な髪がこれまた魅力的にしなりと揺れた。

「いえ、貴女が進むならそれでいいの……でもね、彼は貴女を視界にいれたりしてないですよ」

「わかってる。だから、振り向かせようじゃないの」

「……なるほどですね、失礼いたしました」

思わず丁寧な言葉遣いになる自分にびっくりである。

だって、クラスメイト相手にこんなにおびえたことなんて。

さらに不気味な微笑を表す山田真由に、下手に口を開けては危険が訪れると真実を悟った気持ちでいたのだ。

ああ、こわいこわいと周りの女子もひそかにささやいていた。

「本人に聞こえちゃうから……やめなよ」

そんな川辺陽の声でさえも、山田真由と言うこの女は聞こえなかった。

問題はないだろう。みんなの笑い声が大きく大きく広がっていく。この教室を包み込むんじゃないかとね。

山田真由に向けられたのはそのごく一部だけであったが。

やがて、次の授業が開始された。

ノートに文字を書き、黒板を見上げるたびに彼女の事を思うのだ。白石有紗、自分をどう思っているのだろうか。

もしかして嫌われているのかも。

手がなかなか進まなくなる。

彼は授業中、積極的な方だったために、先生が心配して顔色を何度

か伺ってきたりした。

大丈夫な訳ないではないか。

正氣に戻り、シャープペンシルを走らせるも、どうも動かない。

この後も彼の頭は大きな白と黒の渦にのまれかけることとなった。

一つの案が浮かんだ。

有紗の様子をやはりゆっくり見ていよう。

なんとなく、彼女との帰りが心地よすぎて身を引く事が出来ないのだ。

ここで身をひいてしまっではなんだか後悔をするような。

運命的なもので結ばれたようなものだ。実際そうかもしれないとどこかで思っているわけなのだが。

最近部活をさぼり気味だ。有紗と帰る事が楽しいから。

そんな理由ではない。

一緒に帰るのをいい事に、理由にしてサボっているだけなのだ。

第十三章

数日間、有紗との間隔を取ってみた。

お利口な事に、彼女は毎日のように自分を待っていてくれたらしい。友人や幼馴染の話によるとうつむいて、まるでロボットが機能停止になったように動かないでいるらしい。

家のベランダからその姿をじっと観察することもあった。

たしかに彼女は自分を待っていてくれる。

不安から一気に浮きあがった心はなんとなく、鼓動の音が。

張り裂ける思いだった。胸が、ガラスが割れるように。

「今日は部活ないって言ってこいよ、ほら」

拓斗の背中をポンポン、と押すのは有紗の幼馴染、浩太^{こうた}だった。

違うクラスではあるが、拓斗とはよく仲良くしてもらっている。

すこし大柄で、優しく、いい友達だと思う。

彼なら解ってくれると思った。自分の気持ちを。

「早くいきなよ、ほら」

浩太の好きな人は佳苗だ。

理由は”幼馴染だから”ということは、有紗が好きでも十分あり得る。

だったら、すこしは共感でもできるとなんとなく期待を寄せていたのと、

もし「やっぱり有紗が1番なんだ」といきなり謝罪されてもこまる。安心感と嫉妬の気持ちちがまじりあい、足も何も動かなくて。

「おおーい、有紗あああああ」

機械人形のように有紗は歩いてきた。

彼女の動きはなんか見えていて気持ち悪い。

その気持ち悪さが癖なのだ、好きなのだ。

嗚呼、なんだか自分壊れてきたな、拓斗は恥ずかしくて思考回路を

こっちに向けていた。

「なあに、こうちゃん」

「こいつが何か言いたいって」

もちろん、有紗様はちゃんと察しておられた。

拓斗の眼が泳いでいるのか、自分から逃げているのか、有紗にはわからなかったけど、

彼は恥ずかしがり屋さんなのだ。それでもってあどけなくて可愛らしい。

この世のだれよりも解っているつもりだ。

「えっと……その……ね、今日は部活休もうと思うから、帰るから」「一緒に？」

頬を赤く染めてこくりと頷いた。

弟萌えなんてないが、不覚にも胸に詰まる。

思わず笑い出しそうになるが、こうちゃんこと浩太からの視線が痛い。

「あ、じゃあ俺帰るわな。んじゃあ」

「あ……あああ」

こうちゃんは「続きをどうぞ」というように去っていった。

ひさしぶりの帰りである。

二人一緒に、手をつないで帰る。

もうだいぶ暗いから、周りにはバレまい。

でも、しっかりと目撃している者もいた。

「わっ……」

少女、庵ちゃんであった。

これもあどけない笑顔で、有紗にすり寄ってくる。やっぱりなつかれてしまったのか、あーあ。

「これ？その前言ってた探してた女の子とかって」

「あー、そうそう」

二人の手は離れた。

庵が有紗を引っ張ったからである。

ある程度走らされて、くるりと庵は後ろを向いた。

拓斗の足が衝動的に二人による。

すると、庵は拓斗を嫌うかのように大粒の涙を流し始めた。

「わっ、何々、どうしたの庵ちゃん」

「……俺がいけない？」

ジイイイ……。

小さな音、鞆の音、開く音。

リカちゃんである。あのブタで無駄になまっているリカちゃん。
庵に渡されたぬいぐるみ。

「かわいそうやねー、庵、大丈夫やけんね」

「うあ……」

拓斗が覚めた目でリカちゃんを凝視する。

ブタがしゃべったのだ。ぬいぐるみが。

いや、それより有紗が学校の鞆にそれを忍ばせている何て思っ
てなかったのかもしれない。

「この子ね、家がないんよ。ああ、それは我慢できるらしいんや
けど、やっぱり淋しいんよねっ？家がないのはね」

続けて「家にすこしの間でいいけ、住ませてくれんかね？」と言
った。

「いや……俺は、無理」

「え……あたしも無理かも、どうしよう」

焦りだす有紗も中々可愛いものだった。

なんだろう、彼女の言動ならなんでも可愛く思えてしまう。

やっぱり俺は、おかしい。

「もう、そんなんでもいいんよ！で、無理かね……」

ちよっと待っててもらえるかな、庵ちゃん。

その言葉を残して有紗は家へと帰った。

ゆっくりと空の色を見る余裕もなかった。

第十四章

必死の思いで親を説得した。

「友達のいとこなんだけどね、その友達がいそがしくって家に迎えてやれないんだって、だから――」

こんなでたらめな言い訳に、親は了承した。

気味が悪いほどあっさりだった。

そのかわり、ママは忙しいからちゃんと遊んであげれるんならね、と言われた。

外に戻ってみると、拓斗と庵が仲良く遊んでいた。

さっき泣いたのは、家がなく淋しいからだとしりかちゃんは言った。

拓斗も小さい子が好きなのだ。

それは小学生のころから知っていた。

「ごめん、ありがとうね。じゃあ、帰ろうか」

「……ママ！」

「ママ……？」

庵が言葉を発したのだ。

りかちゃんとはまた違い、甲高く透き通るここのよい声だった。

有紗の事をママとよんだのだ。明らかにそれは間違っているが。

「パーパッ」

「……へ？」

拓斗の腕にしがみついて庵は離さない。

有紗は顔を赤くした。

機械的に言ってるのかもしれないと思ったのだが、それでも嬉しかったのだ。

無邪気な少女が帰る気になるまで、二人は立ち尽くしていた。

「へえ、そうなんだあ」

佳苗は今日も朝から元気がいいのだ。

朝から大声で、悩みなどなさそうな人間だ。

「可愛い子？ねえ、こんど一緒に遊ばせてよん」

「うん、喜ぶと思う」

佳苗も幼い子が好きなようだ。

彼女は一人っ子だから、幼い子の世話をやきたくなるのかもしれない。

自分も幼いころはそうだったかなあと。

「おじゃましますー」

佳苗だ。シックなTシャツに七分丈のジーンズだ。

長い髪を振り払う姿は、乙女でありながらとても凛々しかった。

「わあ、この子がイオリちゃんなんだあ。可愛いいい」

「……」

庵は口を開かなかった。

彼女は喋れないのだ。

昨夜のママとパパは気になるところだが、それ以外なにも喋らない。

「人見知りさんかなあ？大丈夫だよ。お姉さんめげないからねん」

結局庵は口を開かなかった。

がっかりした顔で佳苗は帰って行った。

きつと色々な意味でがっかりだったのだろう。

それは、ジュースを出した時のことだ。

庵はどうやら桃色を好むらしい。

ほんのり桃色のグラスに注いだら、それで飲みたいと聞かないのだ。佳苗がすでに口をつけ、飲んでしまったものを飲もうとするものだから。

どうしても飲みたかったのだろうか、庵はグラスを無理やり取ろうと、力任せに引っ張った。

佳苗も力を抜いていたのだ。こんな幼い子供がこのグラスをとれる

のかと。

変に力を入れたせいでグラスは横転、割れ、お気に入りの佳苗の服に大きな染みが広がった。

それから寝るまで庵はずっとすすり泣きだったのだ。

なんと頭をなでたりしても泣きやみはしなかった。

泣き疲れて寝てしまった。

暗い部屋は嫌いだと昨日の夜なかも泣いていたのに、今日は暗い部屋で寝ているじゃないか。

有紗になんともなく笑みがあふれた。

第十四章（後書き）

ふう……。

やっとひと段落つきました。

なんだかダラダラとなつてしまいましたね。

少なくともあと半分は続くでしょうね。

40タイトル以内に終わるでしょうか……。

なんか、アクセス解析を見るとちまちま読んでくれる方がいるようです。

こんな駄作に付き合っていたきまして本当にありがとうございます。

できればこれからも見てやってください。

さつと読みとおすだけでもいいので＜＞

これからどうなるかの詳細はよく考えてまでんが、頑張ります。

第十五章

「ははははっ」

「何がおかしい？」

翌日、そんな話をしたら佳苗に笑われたのだ。

机をドンドンと叩く。

「なんかお母さんみたいな感じ」

「……そうかい」

有紗は頬杖をついた。

彼女のくせはいつもそうしていることと、貧乏ゆすりである。

「昨日の服大丈夫だった？」

「うん、なんとか大丈夫だったあ、庵ちゃんにも言っというて」

昨日はあれほど泣いていたのに、今朝家を出るときは笑顔だった。所詮は子供だ。やはり、そんなものだろう。

今度から庵にはプラスチック製のコップで飲ませようと、あの時有紗は思った。

たしか有紗の手の届かぬ棚に眠っているはずだ。

帰宅。

もう夕飯の準備をし始めたようで、いい匂いがただよってくる。献立が何かは匂いだけではわからなかった。

「ただいまー」

庵がニコニコしながら出迎えてくれた。

とても輝かしい笑顔だ。

手には鉛筆を持って、絵を描いていたらしい。

よく見るアニメなんかで見る小さな幼女の遊びなんかはこういうのが多い気がする。

「わぁ……なんだろうこれ」

しかもその絵のクオリティまでアニメの幼女並だ。

あまりうまくはないけれど頑張って書いていたのだろう。

俺は何か物欲しそうな目でこちらを見てくる。

何も今、持っていないのだが。

とりあえず部屋に戻って鞆だけ置いてきた。

暗い部屋から出ると、俺が更に何かを訴える目で。

「えっ……何」

扉の前に立っていたのだ。

部屋に入りたいのなら言ってくれば扉を開けてやったのに、
ああ、でも俺には無理であった。

それならばリカちゃんでもよかったのに。

「ここにおるんやけど？」

リカちゃんが床を転がりながら……。

不気味である。気持ち悪い。

こちらにくるとによこによこと歩いて有紗の足を登ってくる。

「あの絵、見たんやろ？」

「ええ……見ましたが」

「ご褒美がほしいみたいなんやけど？」

「……持ってませんが」

えええ、と言われた。

飴ちゃんが欲しいのならば、お母さんにもらってくればいいのに。
でも考えてみればこの2人じゃそれは無理だった。

しゃべるぬいぐるみ、君が悪すぎる。

「わかったわかった、ちよつと待ってて、持ってくるから」

「ちよつと」

リカちゃんの言葉も届かず、有紗はキッチンまで言ってしまった。
本当は飴をねだりに来たわけじゃないのにねー、と俺に言った。

俺の表情がなんだか可哀想だ。

飴じゃ駄目なのだ。飴じゃ。

「苺味でよかったかな？」

「……」

庵は笑いもしないから、有紗はびつくりした。
昨日もこの飴をおいしそうに食べていた

第十五章（後書き）

すいません、結構間が空いてしまいましたね。
小説の事を忘れていたわけではございません。

このところテストやら色々ここに座ることができなかったんですよね。

一週間前に終わったわけですが、
なんとなく描くのに息詰まりまして。

やっぱり書いて面白、というかなんとか
うまく語源化しにくいのですが

続きがさっさと書きたくなるような所じゃないんですよ、ここは。
正直省いてもいいような、無くてもどっちでもいい場所を描いてお
りまして。

すいませんね、いい加減で。
ごめんなさいです。

第十六章

「ほんと、わかってないんやねえ」

「苺じゃ駄目ですか？」

「飴じゃダメなんやけどね」

リカちゃんがピシピシとこちらを指差す。

とはいえ、彼女に指は無い。

ついているのは腕に見立てた一部でしかない。

それを力一杯に振ってるように見える。

「他にお菓子をねだっているのですか？」

「ん、もう。ひねくれた奴やねえ。もっと単純にっ！」

童心なんて昔の事、記憶から抹消しました。

そう言ってもどうせ何かうるさくいわれるだろうと思ったから、

吐かずに飲んで戻しておいた。

「頭ぐらい、なでちゃーりよ」

「……」

なんだ、単純な答えじゃないか。

無駄に思考回路をまわしてしまった、ということにしておく。

改めて”撫でなければならぬ”となるとなんだか気が引ける。

照れくさい物である。それが年下の女の子に向けられたものだとしても。

茶色、ツヤツヤの髪の毛、その上に手を置いてゆっくり滑らせる。

小さな笑みが庵にこぼれた。

なかなかの可愛い子じゃないかと思った。

自分には妹はいないから、理想の妹像に近いものだった。

まあ、現実の妹と言うものは、それほど可愛いものでもないだろう。弟のいる有紗にはよく解っている。

最近、やっぱり少なくなった。

二人の時間が。帰る時も、もう日が合わない。

拓斗は部活で忙しいのだ。

彼が幸せならばそれでいい、偽善者ではないがまあ、そんなところだろう。

とても拓斗が楽しそうなので、無理に待って早く終わらなきゃと言うプレッシャーをかけまいともう最近一緒に帰っていない。

そのせいか、なんだか彼と有紗の間にはなんとなく溝ができた気がした。

なんとなくだ、もう向こうにどうでもいいと思われてる気がして、思うように動けないのだ。

よけいに嫌われたくはないし、まわりから見えるのも嫌なのだ。

好きなものはガラスの箱に仕舞うより、鍵付きの、中は決して見えない箱のほうが安心だ。

「そんなんじや駄目やないね」

数日して、怒られた。あのブタのぬいぐるみに。

「あんたねえ、リカたちが何のためにね……」

途中で口を閉じた。

庵のクリリンとした目が不思議そうにこちらを見つめている。

この子に言葉は理解できるのだろうか。

きっとそうだとしたら、聞かれてはいけない。

何かちょっと重い話なのかもしれないと、察しのいい有紗は悟っていた。

薄暗い廊下に立たされて、薄暗い気持ちでリカちゃんの動きを待っていた。

「ええと……なんやったっけ、とりあえず頑張らんといかんよ」

ご機嫌そうにステップを踏みながら庵の元へ向かうブタの後ろ姿。

「なんでだ……」

ふいにそんな言葉が漏れたのは、ブタに駄目出しなんかされちゃって。

しかも”頑張らんといかんよ”プレッシャーをすこし落とされた感

じがした。

それにしても彼女は何処の言葉をしゃべっているのだろうか。

あまり近場にそんなこと喋る人間なんていないから、ちよつと聞き取りにくかった。

涙の哀しい味

そんな彼女に、絡もうとする者は2人も居た。
一人は俺である。

なんだかよくわからないけど、最近不安の色であふれそうな目をしてこちらを見つめてくるのだ。

まるで「このままじゃいけない」と言いたげだった。
でも彼女は喋らないのだ。

喋れないのだろうか。どっちにしろ表情でしか意思表示をしないのだ。

それほど重要なことでもないだろう。
考える意味がない。

そしてもう一人は山田真由である。

彼女はまだまだまったく拓斗のことをあきらめては無かった。

なんだか色々な意味で恐いと有紗は思った。

「ねえ、最近仲良くないよね」とか、「さっき島谷くんが――」とか
色々話を吹っかけてくる。

こういう人間はもちろん嫌いである。

声に出して本人に云うほどでもないが嫌いである。

そんなに島谷くん島谷くん言わないでほしい。

”島谷くん”じゃいまいちピンとこないからだ。

そして授業である。移動教室の。

もう言うまでも無いが、隣の席は拓斗である。

いままでは結構何も思わなかったが、ちょっと仲が良くない、
つまり悪いによってきたときになんと言って隣に座ればよいものか。
なんだかおそろしさしか込み上げてこなかったから、できればこの
授業は受けたくない。

相変わらず、理科室の机はふいた跡が目立つ。

きつと机を前にふいた奴はちゃんと絞ってない。そう思う。

隣の女子とも話をしながら実験を進めていく。

「ねえ、有紗」

そんな言葉を先に発したのは言うまでも無く拓斗だ。

有紗を下の名前で呼ぶ人間なんて希少価値だ。

特に男の子に限っては本当に貴重なものである。

「なあに？」

まるで「相手にしないでください」というようにふてぶてしく言
ってやった。

内心、ちよつと可哀想なことしたかな、とか思ってしまった。

「ええと、もうさ、部活大丈夫そうでさ」

「いいよ、もう。俺もいるし、早く帰らないといけないの」

「そっか……」

解る、いつもは喋るだけで口から心臓を吐きそうになるほどドキ
ドキしていたのに。

最近それは無くなった。普通に平常心。

本人にももちろんわかっていた。なんだかおかしい。

ちよつと冷めたのではないかと。

だから、彼に対して取る態度が今までとは若干違っている。

それに気付いた拓斗も実は少しひいている状態なのだ。

それも解らずに有紗はやっぱり自分に気はないのだと落ち込む。

家に帰る。鞆を置く。

なんとなく意味も無く泣きたい気分だ。

でも俺が出迎えてくれている。ふざけるな。

一人にさせてほしい。でもそんな時間は私の中のどこにあるのか？

そんなことわからない。もしかしたら無いかもしれない。

そんなの悲しすぎる。ゆっくりしたい。

自分の涙にぬれて溶けてみたい。

溶けて蒸発すればいい。雨にもならず、もう降り注ぐことも無いだ

ろう。

この地に、床に、足をつくことも無くなるだろう。

「おかえりって俺がいいよったよ」

「あの子は喋ったりしない癖に……」

「もう、冗談っちゃ。でも、帰ってきて嬉しそうよ」

わかったから、そう言っただけをあさるふりをした。

どこから見ても今の私は忙しいですと見えるよう、

有紗は精いっぱい演じた。忙しさを。

「忙しいんやねー、やっぱり中学生ってもんわねえ」

部屋からリカちゃんが出ていった。

扉を閉め、それにもたれかかり、声を殺して泣いてみた。

誰にも解らないように。泣いた方がいくらか楽になるのは知っている。

鬱になって泣くと心が晴れるが弱い自分の鳴き声を聞くのは嫌いだ。怒りをぶつけるものも見つかからないから、涙に変換してすべて出す。そしたらすぐに楽になって、いつのまにか開き直るのも知っている。昔から知っている、知っている。

第十八章

庵の不安そうな顔。

誰も知らないところで、一人庵は不安だった。

表情の通りだ。普通に不安だった。

「なんでそんな顔するん？一人にさしてほしいんよ。これでも頑張ってるよ。」

庵は首を左右に振った。

誰が我慢するものですか、というように。

「これ以上ここで何かを起こすなんて無理やろ？わかつとるくせに」

庵の顔はあくまでも真剣だった。

ばちくりとした黒い眼も今日は一段とすどろく光っていたし、

口もかたく、かたく結んでいたのに、

それなのに目からは大粒の涙が流れる。

我慢しているわけではない。自然とこうなったのだ。

「もう好きにし」

庵はその言葉を聞いて死んだように泣きやんだ。

その次の日の事である。

今日は休日で、有紗も昼間でずっと布団の中で過ごそうと思っていたのだ。

だが、外はかなりの悪天候で、風もかなり強い。

だから、外の音で目が覚めてしまったのだ。

8時から11時まで、目を開けたまま布団にもぐっていた。

でも起きてみるとどうだろう、外は急に静かになった。

まるで有紗が起きるまで降るだけ降っておこう、吹くだけ吹いておこう。

そんな感じだ。すこし変な感じを覚えた。

有紗は、なんとなく自分が自然の魔女となり自分を中心に木々や水

やその他いろいろなものが踊ってくれると。

子供っぽい妄想かもしれない。でもないだろうか。

自分の死んだ後の世界を考えたことが。

自分が死んだあとにこの世界はちゃんと継続して進むのか、とか歴史と言うものは始めと終わりはすでにできていて、その一ページ一ページに

自分たちは挿絵としていりこまれたのではないのかとか、自分以外の周りの人間は操り人形やロボットで、全て製造された日から

そのような動きをするように組み込まれていたりだとか。全てくだらない考えごとにすぎないが、似たような事を考えたことはないだろうか。

それと同じようなものだ。

「おはよう……」

庵は今日も一人でお人形遊びに夢中である。

リカちゃんといっしょに。人形のようにきれいで可憐な顔をした小さな女の子が、ぬいぐるみと楽しそうに。

「ああ、ねーちゃん」

その奥に転がっていたのは有紗の弟だ。

最近はあるらしくできた自分の部屋にこもりっぱなしだ。

もう小学生になったのだからと父親が自分の荷物を片づけてわざわざ与えた部屋だ。

それはもうとても嬉しいらしい。

新品の制服が家に届いたときのよう。

いつもと変わらない休日だった。

変わったことと言えば、有紗の起きる時間だろうか。

本当はもっと早起きをして弟と同様に転がって、並んで漫画を読んだりしているものだが、

今日だけはなんとなく布団から出る気がなくて、何も考えがあるわけじゃない。鬱になっているわけでもない。

気持ちがいいのだ。布団の中は。

第十九章

朝食を済ませた。

有紗は、なんとなく弟の教科書を広げる。

まだ小学二年生だ。全然余裕で教えられる。

弟も勉強がそれほどできないわけでもないので、教えてほしいなどとは言わない。

むしろ、姉に聞くより親の方が正確だ。

宿題はいつも母親任せである。

有紗自身もそれほど弟に依存はしていないし、どちらかというとざったいのでありがたい。

「ねーねー、ちよつときてえ」

幼いねっちよりとした声が聞こえたので振りかえる。

舌っ足らずで若干ろれつも回って無くていかにも小さな女の子って感じの声だ。

俺が手招きしている。彼女の声だったのだろうか。

「……」

「えっ」

俺は有紗の手を掴むと、ぐいぐいと玄関へ連れていった。

そして勢いよく扉を開けた。

その勢いのまま、俺は有紗の手を引いて走っていくのだ。

——とうとう誰も居ない薄暗い路地に入って、もうここがどこだかわからなくなってきた。

動きは止まった。でも風の勢いはする。

だんだんぼやける視界と、暗くなる眼の前と、眠気と。

気が付いたら、自分は倒れていた。

いや、有紗が自分の意思でそこへ寝そべったのかもしれない。

よくわからないけれど、体中にアスファルトの痛みを感じて起きた。明るい陽のあたる場所だった。知らないところだった。

遠くの方に家の様なものが見えた。それ以外にはアスファルトと、雑草のプールと。

絵本の中の一ページみたいだ。

もっと遠くには背が高いだけのビル。昼なのは此処だけで都会はまだまだ眠らぬ夜だ。

雑貨家

背の高い草たちが邪魔で、まわりに誰がいるのかわからない。
有紗は、とりあえず家へと急ぐ。

自分のこの状況を考えると、体中がかゆくなる。

足元から虫がわき出るのを想像したからだ。

その気持ち悪さを、足に荒ぶる雑草の奴らが、より一層大きくさせる。

宙を舞うように飛んでいけたら、それだけ楽な思いをしただろう。
扉の前まで来たときに、改めて思った。

近づいてみれば、結構大きめの扉だったのだが、可愛らしい小屋
と言うよりはこの家がアンティーク雑貨の一部のように、雰囲気
醸し出していた。

にじみ出すぎて、まわりのビルや大きな建物、意味もないだろう草
達。似合わない。

そのまたぐちゃぐちゃな感じが素敵だと思った。

思わず、一瞬呼吸がゆっくりになる。そのくらい綺麗に思えた。

重たそうな戸だったが、案外弱い力で開く事が出来た。

部屋の中は薄暗く、ほんのりカビの匂いだ。

不快を感じるほどでもない、本当にかすかな香だった。

ここにはもうだいたい人は来ていないのだろう。

床がすべて埃かぶって、でも窓の間からさす光をいい感じに受けて
いて、なんともいえない。

人の気配もなかった。これでは本当に物語ではないか。

そう思うとくだらなくなってきた口がニタニタとつりあがり、声
を出して笑った。

気が付いたら、外は暗くなりかけていた。

一瞬にして暗くなったのかもしれない。

床もピカピカだ。意味が解らない。

なにかが歪んでいる、目の前の光景を見て有紗は真っ先にそう思ったのだ。

「おなかへったの」

部屋の奥からゆっくりと顔を出す。

庵の姿が、一瞬この世にはいないはずの、科学では証明できない、幼いころ恐れていたあれに見えてびっくりした。体中がふわぁーっと寒くなるのを感じた。

「おなかへったの、ねえ」

あのねちっこい声だ。

「い、庵ちゃん……？声……」

「おなかへったの、ねーえー、ごはん」

ああ、そうだ。間違いなく彼女は喋っている。

なんだ、ただの人見知りだったのか。

私には心を開いてくれていなかったんだ。

お腹がすくと頼ってくれるのか。

冷蔵庫へと向かいよる。食品は十分にそろっているのだ。

誰が購入したのか、何のために、いつまで食べられるものなのか。

「ねえ、これっていつまで食べられるの？」

「……いおり、そんなの知らない」

そうですか。

そうだったら調べてしましましょう。

有紗は冷蔵庫の中の食品を見たり、匂いをかいだりしてみたが、とくに腐った様子はなかった。

あんなにさっき、汚かったはずの部屋なのに。

掃除もせずに食料だけは補充しているのか。

もう床は綺麗だから、掃除の際に買って、置いておいたのか。

あの汚れようじゃきつとまた掃除をするまで時間が開くだろう。買って意味ないじゃないか。

「きょうのごはんはなあにー？」

「うーん……シチューでも作りましょうか」

材料、十分なほどにそろっている。

時間もまだ1時間はある。いそげばそのくらいの時間で一鍋くらいはできると思った、確信した。

ぎぎぎぎぎ

扉の開く音だ。

重たそうで、無駄に大きいあの扉だ。

雑貨家（後書き）

雑貨家とかいてざっかやと読みます。

なんかですね、前回の19個目の話ですが、内容をかなり削りました。

拓斗君にはひっこんでいただきました。

なんとなく、こちらの方が話が進めやすいと思ったのと、安易にふたりをいっしょにしてはおもしろくないかなとね。かなり修正して、短くなってます。

なんか重症と感じました。

久しぶりにこの小説1個目の話をささっと読んだのですが、拓斗君の名字忘れかけてました。

最近島谷くんなんて描き方する事へっちゃったからでしょうかねえ……。

冷めた夕食のスープ

「おかえりなさい」

「ちよつと待て、それは……」

驚いた。扉を片手で押しあけて、そこに立っていたのは、拓斗であつた。

すこし息を切らせた様子で、そこに立っていたのだ。

ゆっくりと歩みよると、居場所を目で探した。

「おかえりなさい！ ねえ、もうすぐごはんなのよ」

「え？ あ、うん……そうか……うん」

拓斗がぎこちなく頷くと、俺はニコニコと有紗へはねた。

私には関係ない、というように彼女は黙々と食事の準備を再開した。今、ニンジンを切るところだ。

「食べて行くの」

「うん、じゃあ……そうする……よ」

少しひき気味の拓斗の態度があまり気に入らなかった。

なんだそれは、もしかして私のご飯を食べたくないとも言うのだろうか、

無言のままにそう考えを張り巡らせ、タマネギでやられた目を有紗はシヨボシヨボと瞬きを繰り返した。

ちりちりというお湯音がぶかぶかに変わった頃、

「ねえ、ママおなかへったよう、まだなの」

有紗のスカートの裾をくいくいと引っ張り、申し訳なさそうにつぶやいた。

これはお母さんごっこではないの、急いで作ってるからもうすこしだけ待っててくれ。

俺を向こうへ追いやると、泣きそうな声で

「はやくたべたいなー」

アクを取り除いて、やつのことでシチューのもとを投入する。くつくつと非常においしそうな音と香りを放ちながら、物は熱をさらにあげて行く。

シチューに入れたこの茶色い大きな塊を、そのまま舐めあげてみたら、どんな味がするのだろうか。

もしかしたらおいしいかも、それかなり濃いものになるだろう。いや、でも油の塊であるからあまりそういうことはしたくない。

自問自答を繰り返す事、やっとなで出来上がりましてお皿に次いだ。救われたシチューからの美味たるにおいが、つついよこしまな気持ちを生んでしまう。

すこし指につけて舐めた、結果的に人差し指がヒリヒリとしている。

「わーい、ごはんごはんだー」

庵だけがその喜びの声をあげている。

あとの二人はなんだか居心地が悪すぎて、口を開けずにいた。

「ねえ、どうしたのー？ たべないの」

「あ、ううん……じゃあ、いただきます……」

どうしてこう、うまくいかないのだろう。

庵は幼いながらも幼い思考で懸命に考えた。

どうすれば、有紗と拓斗は仲良くなってくれるだろうか、

自分はあるの二人が仲良くなってもらわねばこの先、

とても困る事になるし、そうと解ったり自分のせいでそれが歪めばどうなることだろうか。

せっかくここまで無理をしているのに、どうすれば、どうすれば。

庵はそのまま床の上で寝てしまった

ほっぺのいろはしあわせのいろ

「庵、庵……？」

ゆっくりと目を開く。

薄暗い室内に、あたたかな光が窓から注ぐ。

頭がすごく重い、どうやらわたしもげんかいのようだ。

庵がそう背水の陣で目をもう一度閉じたときだった。

「えっ、ね、寝てしまうのですか」

ごめんなさい、わたしはもうここにはいられない。

「それは困るんだけど……ちょっと」

それはもとはあなたがいけなかったのです。

「起きてってお願い！」

もうおそいのですよ。

「何騒いでるんだよ、お前」

「あっ、そっかあ」

庵は眼を見開いた。

そこには自分を除く有紗と拓斗の姿があった。

なんだか二人は優しい目の色をしていたから、きつと、良かったんだと思う。

「歩けない……かなあ、よっしじゃあ」

有紗はぐると首をまわして拓斗を見た。

ふわりというよりパサツといった具合だが、長い髪も一緒に動く。

一瞬どうして見つめられているか解らなかったが、照れで赤面する前に悟った。

ああ、なるほどそういうことか、と。

「落とさないでね、可哀想だから」

「んなこと解ってるって」

首の後ろと太ももに手をまわすと、軽々と庵を持ち上げた。

妙な温かさを庵は感じた。

頬が赤いのは、照れとか、そういうことではない。

体が熱を帯びているからだ。それと、

不覚にも懐かしさを感じた興奮からである。

「大丈夫……かな、あたし人間を看病した事無いんだけど」

「俺だつてないよ、どうしよう……」

ああ、しあわせですね。

俺はそう思い、安心して目を閉じた。

夜、ひんやりと冷えた床の上で寝てしまったためだろう。

風邪をひいたのだ。

可哀想に、と頭をなでる有紗と、落ち着かない様子で室内をうろつく拓斗の姿を見て、俺はきゅんきゅんとした。

それほど高めの熱でもないだろう、拓斗はかなり心配をしているよ
うで、

薬は無いよなあ、病院も無いよなあ、何すればいいのかなあ、風邪
つてうつしたら治るのかなあ、

本当に幸せだなあ、そう感じて再び固くまぶたを閉じた。

がいしゅつ

「あそびたい、あそびたい」

「え……ちよっとお前……」

ぴよこぴよこと飛び回りながら、ボールを持ち、今にも目玉が割れそうなほどにキラキラしていた。

「ぬるぬる動く……」

庵は、フラフラとしながら外へ歩いて行った。

おいおい、扉を開けられるのかよ。

それに何かいけない薬を大量に飲んだやつのような動きをするから、ちよっとおそろしいという感情に駆られた。

「待て、ちよっと庵ちゃん」

「あそびにいこう、ねえ、あそびにいこう」

眩暈に襲われた気分だ。頭の中がぐわんぐわんと啼いているようだ。

絶対に言う事を聞いてやらなくては、彼女は頭から碎けてしまうよ
うな。

「駄目だって……そんなことしちゃあ」

「いやだ……やだもう、げんきなのに」

赤ら顔でそんなこと言われても、

とりあえず、有紗を起こしてきたのだが、眠たそうに眼をこすって
全然話を聞いてないな。

「あそびにいききたいの、そしておかいものしたい、ゆうえんちいき
たい、おともだちのいえにいききたい」

「我儘はいけないって」

「……どうして？ パパはわがままいわないの？」

「パパ……？」

庵の目の輝きはどう見ても拓斗に贈られたものだった。

父親に等しい存在となったのか、それはまず、ないと思う。

「いわないの？」

「言うはずなかるーが、さ、早く寝た寝た」

拓斗が庵をおいやると、彼女の顔は歪んで、目から大粒の涙が滴り落ちた。

ボトン、ボトン、舐めたくなる、飴玉の様な涙だ。

「なんなの？どうしたいの？あたしに全部聞かせて」

優しい声で語りかける。

それほどいきたいのなら、行かせてやればいい。

熱を出してしまつては自分が悪いのだから、ゆつくりと苦におぼれて思い知ればいい。

だって、絶対に言う事を聞かないと、彼女が壊れそうで。

「しょうがない、行かせてあげようよ」

「やったああ」

「みてえ、キャンディーみたいなボールよ、いおりのボールなの、きれいでしょ」

一人でキャツキャ、走り回って叫んで、本当に幼い子供でしかない。

あどけないといいあらわすには、まだもう少し幼く無邪気で、こんな顔も将来しなくなる事だろうな。

昔はあんなに元気で明るかった有紗が思うのだ、そうにちがいない。

「あきちゃった。ねえ、つぎはおかいものいきたいの」

お洋服に、おもちゃに電化製品、日用品。何を求めてそこへ行くのか

そんなこと庵はどうでもいいようで、とりあえず買い物として歩けばいい。

「わかった、わかったから、お願いだから、そんなに手をひかないで」

腕からボロボロと砂の塊に変わり、もろもろに碎けてしまいそうだからだ。

そんな気持ちに不思議となるもんだ。

庵の愛らしい笑顔を見ていると。

「愛らしい……だと……」

たった数日間だが、もう姉妹パーツの一つでしかない。

向こうも普通にしていたってくれているわけだ、いいではないか。

がいしゅつ（後書き）

なんか、最初はまったくなかった大きな出来事を、この物語の途中に入れたと思います。

私は、この間から周りの環境が若干変わりました、それについては別にどうでもいいのですが

なんとなく自分の心理をそのまま描きたくなるんですよ、私ってそういうことですので、まだまだこの話は長引く事になりました。まだ話の新しい構想はあまり立ててないのですが、なんとか頑張って行きたいと。

そうです、久しぶりですの挨拶もなく、失礼しました。

一ヶ月ほど放置しておりました。

テスト勉強やなんちゃらで中々こちらにまで手が回らなかったのです、

ごくわずかですが少々放置していても何を求めてか、わざわざこちらのページにアクセスしてくださる方も居るんですね。

ありがたいことです。誠にお礼申し上げます。

その方々にはかなり長い待ち時間だったと思います。

基本的、私はマイペースなので間が開いたり、一気に更新したりありますが、ご理解いただきますよう、お願い致します。

今更なんですけどね

冒険の

全てが灰色のさびしく、虚しい場所で、3人は歩みを合わせていた。これがどんなにつまらないことだろう、拓斗はさっさと用を済ませて帰りたいのだったが、庵と有紗の笑顔を見ては、罪悪感を抱くこととなる。

「なあ、いつになったら帰るのさ」

「かえらないよー、つぎはね、ゆうえんちがいいの」

さすがにそれは無いだろう、もうこんな時間だ、夕方だ。

「いやだー、せつかなのに、なのに」

「わーかったわかった、また今度行こうな、でも今日は帰ろう、な」
もちろん、拓斗の今度などないつもりだ。

今度、今度、そういつておけばこんな小さな子はすぐに忘れ去るかもしれない。

いや、でもよくよく考えてみれば、小さい子っていつまでもそんな事を覚えている気がする。

ちよつと前に、家に親戚の年下の男の子がきた時に、帰るまでずっとリンゴジュースリンゴジュースとぐだぐだいていたのを思い出す。

結局その子の母親が「オレンジジュースで十分です、なんか今日は興奮して我儘なんですよー、ごめんねー」なんていい、回に行く事もなかった。

というか、子供ってオレンジジュースに食いつくものだと思うのに、リンゴジュースじゃないと駄々をこねる子もいるのだな。拓斗はどちらかといえばオレンジ派だろう。

そんなことはどうだっていい。なんとか納得させて、帰宅。

ここは自分の家ではないが、帰ってきたのだ。

「ねーねー、パパー、ゆうえんちいくんでしょ、あした」

「お前、ちと調子に乗りすぎだぞ」

？

「家族ごっこはもうやめにしようぜ、俺まだ子供とかいる歳じゃないしな、どう見たって中学生だろ？な」
??

「だから早く俺たちを家に帰してくれよ、もうちょつと自重しろよ。小さいからってすまされるもんじゃないんだぞ、わかったら俺だけでもいいから戻らしてくれよ」

「やだ」

この娘は、まともな教育も受けていないのか。
少々対応に困る者の、ここは我慢である。当り前だ。

「なんでなんだ、何がしたい、このままじゃお兄さんホームシックで孤独死するからね」

「ごどくし」

目の奥のギラギラしたはてなマークを見ると、ため息しか見ないね、もう。

なんてアニメ的な世界であろうことか、幼女に誘拐されて、見知らぬ場所に、それから自分で出口を探し、この意味の解らない地からおおさらばだ、そうしよう。

深夜会議、実験計画中

そんなこと、この男がするわけ無かろうが。

もう、こうなったらここで息絶えるしかないのだ。

でも、その後数日の事である。彼女はとても不安定になった。何故かはわからない。

それとともに有紗を含めた三人の関係もグラグラである。

それはしょうがない、我儘な奴に結構静かな女の子たちだ。

拓斗が幸せに過ごせるわけないだろうに。

それも理解できずに、子供と言うものは一人で落ち込んでいる。

このまま精神的に追い込んでやったら、どうなるだろう。

心の内側でガラスの碎ける音を聞いた気がした。

それは、理性が碎けたわけでもない。ただの好奇心だったのである。こんなことはないだろうか、小さな可愛らしい赤ん坊を見ると無性に泣かせたくなるのを。

それと似たような出来心であると言えるかもしれない。

「というわけでだな、俺ら、絶交しようぜ」

「何故あたしが拓斗の庵いじめに協力しなきゃならないのだ」

「おもしろいじゃないか。子ども好きなお前はあの可愛い顔見て思わないの？泣かしてやりたいって」

「うん……まあ、確かに思わない事もないけど、あんな性格はちょっといただけないかな」

庵が寝た後で、少々会議を行った。

というわけで、その次に朝が到来したならば、二人は一切の口を利かない事にした。

庵の前で互いの悪口を、そして短所を語り泣き崩れ、二人で喧嘩でもしてしまおうと。

なんと子供らしい発想なのだろう。まだまだ二人も童心を捨てきれ

ないのかもしれない。

「これは一つの実験だからな、別に意図的にいじめてるわけじゃないんだぜ」

「どう言われても意図的にしか見えないんだけどね」

「うるさいなー、だから実験と言ったろ、家に帰りたいだろ」

「うん、家の事とか、俺の世話とか、身体が今にも砂になって崩れていきそう」

「……そうかい」

まだ冷たいままのジュースを飲みほして、その後、二人は少々の世間話を続けた。

「なんか最近こんなのなかったよねー」とか「学校ってどうなったの」とか「親に何も言ってない」だの。

きつと親は今必死に自分たちを探していて、そんなもって警察も頑張ってくれているかもしれない、今頃テレビで数日間放送されているところだろう。

発見が遅れば遅れるほど、再びテレビに名前が出るぞ、なんて。

警察が必死に捜査しているのならば、自分たちの居場所ぐらい突き止めてほしいね。

そんなことより、この家テレビがない。

「んー、じゃあもう俺寝るわ……お前も早く寝ないと、ほんとに砂女になるぞ」

「安心しなよ、あたしは夜行性なんだし、コーヒー飲んじやったし、明日は昼まで寝る予定だし」

「それは嫌だ」

どうして？

「あのガキと昼まで二人でいたくないから。あ、それなら俺も昼間で寝ればいいのか……」

「おやすみなさい」

深夜会議、実験計画中（後書き）

ええ、私は赤ん坊を泣かしたくなる人間です。
よく小さな子に凝視されるのです。無表情で。

なんとも私のよからぬ思考をすべて吸い取ってしまうかのように目を見開いてみるのです。

私が笑っても何一つ表情を変えやがらない。

近くへ寄れば自然と笑ってくれます。可愛いです。

でも、その笑顔を見ると泣かせたくなるのです。

痛めつけるのではない、泣かせたいのです。

もう私の記憶には残っていません、10年前の事です。

私には初めて弟ができたのです。

妹だったら”いちごちゃん”という名前を親に提案する予定でしたが、弟でした。

出産が近づいてからは、弟でもいいとか、健気な事をほざいていたようですが、現在になって、やっぱり妹がいいです。

いいえ、姉、それよりも兄がいいです。

そんなことはどうだっていいのですが、昔よく弟をいじめていたらしいです。

昔から腹黒かったんですよね、私って。

弟が可愛かったのか、親戚や親からわいわい騒がれる弟が妬ましかったのかは解りませんが、今とは対照的な強気な性格などからすれば後者でしょうね。

何度それで外に追い出された事でしょう。

ご近所様、10年の時を経て、伝えます。申し訳ございませんでした。

ずっと扉の前で幼い私は泣いておりました。母親が扉をあけるまで。5分ほどだったのではないでしょう。扉があけば「ごめんなさい」それから「わかってる?——」と反省をしておわりです。

これが弟の経験にはないのです。

もう明らかなるエコヒイキなのはなんとなく解ります。

決して私の事を母親が嫌ってる事はないのだと思いますが。

彼女は姉が叱られると思い込んでいます。

自分は一人っ子なのに我慢だの、お姉ちゃんがすることだの。いい加減にしてください。

何度も憂鬱になりましたが、最近だいぶ安定してきました。

一週間ぐらい前に嫌になってボロボロ泣きましたが、月曜日からは少々なくらいで、いい感じです。って

なんなんでしょうね、これは。

自分でも解らなくなってます。すみませんでした。

鬱病日記じゃないんだから、ね。

はい、結論的に私は赤ちゃんに意地悪して泣かせたい。

第二十六章

「おはよおー」

奴が来た！

とうとう来た！早くも作戦決行だ。って、この人たちは何幼く大人げないことをしてるのだろう。

「……」

もちろん、有紗は黙ったままであった。

そうだ、ここで会話をしてしまったては、彼女をいじめられないではないか。

ってやっぱり何考えてるんだろうね、この人たちは。

「……」

「おなかへったよう、ねーえー」

そうだ、もう昼であった。

どうやらお皿が汚れている様子はない、まだ何も口にしてないのだ。家には誰も居ない。自分と、庵との二人だけ。

きつと朝から空腹に耐えていたのだろう。なんだか可哀想だ。

可哀想に、すぎるように見つめる庵の顔がなんだか愛らしくて、心の奥底で『ざまあw w w』などと思いつつも、なんだかごめんなさい、という気持ちに取り巻かれてしまった。

顔は自然にニヤけていただろう。想像しただけで気持ち悪いと思った。

「……解った、何か作るから」

「うわあーい」

今に見ているよ、このフル回転女め。

あれほど二人きりを拓斗は嫌がっていたのに、結局自分は私を置いて言ったではないか。

なんてひどい奴なのだろうねえ。

彼がやつと家に帰ってきたのは、それから二時間ほどたった時だった。

何事もなかったかのように爽快な笑顔。

よけいに胸の奥で込み上げてきたが、発狂できるはずもなく有紗はそれを飲み込んだ。

「おまつ……あ……」

言葉だけは飲み込めず、一瞬声を発してしまった。

昨日の約束、実験はどうなったのさ。

あやうく大声で「おまえ何処行つてたのさ!」と叫ぶところであった。

気をつけなければまた同じことを繰り返してしまう。

「パーパだあああ」

廊下からバタバタと大きな足音を立てて。

そういえば、幼いころに下の部屋の住民から足音がうるさいとクレームを付けられた事があったな。

歩けるようになったばかりの弟がいるのに、なんて人たちだろうね。子供がいないと、そう心は広くならない。これだから孤独な爺婆は嫌いだとこの拾数年思ってきたのだ。

都合のいい時だけ指さして笑うくせに。

「いつまでままごとやってんだよお前」

「おままごとしよ! しよ」

拓斗は「やだよそんな女々しい」と吐き捨てた。

ああ、なんで小さな子供は年上を見るなり自分のペースの遊びに連れ込もうとするのだろうかね。

どうせならば未知の遊びをするお兄さんに任せて遊んだほうがおもしろいと思うのに。

そう思うのは自分だけか。

「ママもしよ」

「忙しいから後でね。あと、いつになったらその呼び方終わるの」
ううう……。

一歩引きさがって腹部に手を当てた。

なんとも哀れな感じに眉をひそめている。

そんな事をしたって、自分は揺らされないと有紗は思っていた。

できればママとかお母さんじゃ無くて、お姉さんとよんでいただきたいものだ。

ただでさえ弟にそうよんでももらえないのに、なんだかとても可哀想じゃないか。

第二回深夜会議中

一人で孤独に浸る小さな女の子。

社会的に、これは放っておけないだろう。

でもそれより放っておけないのは、その少女と一緒にいる少年と少女の方であろう。

その二人でさえ動かないのならば、少女が動く訳もない。

早くなんとか誰かしてほしい。

誰もかれもみんな自分たちの事を忘れたのだろうか。酷い話だなあ。まち疲れて、その少女は眠りについてしまった。

そしてこれまた深夜会議。

「なんか、つまらんかったな」

「……はい、それで実験結果はどうだったんですか、博士」

「まだ実験は終わらないって。俺思っただけだね、もうちょっと過激に行こうぜ」

「……かげき」

「そう過激」

拓斗はこれでもかというドヤ顔になって呟いた。

「これから喧嘩しようぜ、俺達」

「断固拒否、絶対嫌」

「なんてひどい」

それから一つずつ自分の考えをしゃべりだした。

庵の前で口喧嘩をして、発狂しあって、どちらかが家を出て行く。

そうすれば幼く純粋な彼女の心にひびが入るだろう。

「はあ」

「うん、でね、お前に出て行ってほしいのよ」

「なんであたしが」

有紗が家から退散すれば、何も食べれない、できない。

これで空腹と寂しさと気まずさが入り混じってすごい事になるだろ

う。

楽しいだろう、わくわくするだろう。

「やだよ、あたし出て行くのなんか」

「大丈夫だって。時間を見て、俺がなんとかするから。家を出たと見せかけて、この建物の屋根の上に登ってくれないか。たしか裏に梯子があったはずだから」

うーん。少々考え込んで頷いた。

「じゃあ、ご飯持ってきてくれる」

「作れないから、無理だろ」

「わかった。じゃあ適当に何か鞆に入れておく」

「そうしておけ。じゃあ、わかったな？ どうでもいいくだらない事で俺が絡んでお前を怒らせるから」

「……馬鹿らしいじゃないか。それ」

む

「手洗いに行くよ、アリちゃん」

「ちよっ……おまっ」

グサリ。

「ねえ、もう嫌いなのかもよ。有紗ちゃん」

嫌だ。

「……そんなに好きだったんだあ、島谷くんて。あんなおとなしい子のどこがいいのか解らないけど」

何だっていうんだ。

「ね、今日はさびしく一人で帰っちゃうのお？」

死ね。

「あ、じゃあ俺帰るわな。んじゃあ」

ありがとう。

「家にすこしの間でいいけ、住ませてくれんかね？」

「いや……俺は、無理」

「え……あたしも無理かも、どうしよう」

困る。

「なあに？」

どうして、

「ええと、もうさ、部活大丈夫そうだし」

「いいよ、もう。俺もいるし、早く帰らないといけないの」

「そっか……」

何やってんだ、くそ……。

「食べて行くの」

「うん、じゃあ……そうする……よ」

う……。

「ねえ、どうしたのー？たべないの」

「あ、ううん……じゃあ、いただきます……」

あったかい。

むむ

どうしてなの。なぜうまくいかないのかしら。

ワタシ、やっぱり……やっぱり。

ワタシはやっぱりそうなのだわ。ぜったいに

だから、こうしてあたたかくもなれずにすわってないてる。

なくのがわるいコトとかじゃない。

そうはダメもおもってない。

でもね、ワタシはかなしいわ。

なくことしかできないなんて。

でもね、ワタシね

ダイスキなの。それなのに

モトはといえば、あのフタリがじゃまをしたの

ワタシのしあわせをうばうわるいヒトからにげてるつもりだったのに

けっきょくはからまわり、そしてよけいにややこしくなったのに。

どうすればいいの、ねえ

もうどうしようもないかもしれない

どうしようもなくて、ココにいるのかもしれない。

でもね、まだナニもかわってないみたいだから

ワタシ、やります。がんばります。

がんばるけど、このままじゃワタシきえちやいそうで

どうしよう、ダレか

むむむ

身体がほてっている、熱を帯びている。

なんだかとても気持ちいい。

だんだんその身体は堕ちて行ってる。

でも、身体が動いたりしないんだ。びっくりしたりしてね。

たまに落ちる夢を見る。

着地と同時に目が覚める。

なのに、今日は違う。

ふわふわと落ちて行ってる感じがするのは、俺の身体がほわほわしてるからだろうか。

やんわりと地に足をついたけど、力が入らなくて。

俺はその場に座っていた。霧の向こう側に影が見える。

射す光は柔らかいものじゃなくて、冷たいものだ。

心から心地いいと思う周りの色に俺は酔った。

でも、その流れる時間は長いものではなかった。

短くもないけれど。

しゅんっ、しゅんずずず

耳に大変悪そうな効果音を聞きながら俺は、あたりを見回した。

下半身にやっぱ力が入らない。

だから無理やり手で身を支えながら。

外部から見れば、どこかの怨霊が登場したかのような動きだったかもしれない。

霧が薄くなってきて、影の正体がわかった。

なんだ。俺じゃないか。

顔をぐしゃぐしゃに濡らして、俺は俺に飛び付いた。

身体がふにゃふにゃしてたから、俺は後ろの方に倒れた。

幼女の乗った腹部がじわじわと溶けて行く。

涙が滴り落ちたところから、服が焼け、肌が焼け、血が滲み涙が染みる。

苦痛に耐える事しかない俺と、泣き崩れるしかない俺。

「どうしてなくしないの……」

「なん……だって……」

なんの呪いだ。

俺を溶かしてどうするつもりだと言う。

でもその泣き顔は、とても穏やかなものだったな。

とても美しい。胸に何かが込み上げてくる、吐きそうだ。

「どうしていおりのおもうとおりにならないの……してくれないの」

「……そんなの俺が知るものか」

「……しんじゃえ」

ずっと俺の身体からは体温が吸い取られ、とたんに寒くなっている。

むむむ（後書き）

なんだか俺と庵って並べると似てますよね。関係ないです。

第三十一章

もう、それは彼にとって完全なる計画である。
というわけでどうやってもめ事を起こそうか。

まず、食器棚を見た。

皿でも割ってやろうと思った。

でももし怪我でもしたら、もし割ったことで本当に怒られたら。

やめた。少々あぶないかもしれないけれど、ティースプーンを五本
ポケットにしまった。

「なにをしているの」

「んーや、何もしてないさ」

こうなったら、心の底からへこんでしまえよ。

もちろん、計算通りに行くつもりである。

一旦その場にしゃがみこんだ。そしてゆっくりと5秒を数えて再び
立ち上がり、ポケットにスプーンを一本追加しておいた。流し台に
置いてあった、まだ洗っていないそれを。

「なにかヘン。ねえ、なにかヘンだよ……ママー、ママー」

ほうーれ……ひっかかった。

案外こういう子供は簡単なものであるな。

こんなことでは将来、大損害を繰り返す大人になるだろう。可哀想
にね。

「スプーンが無いぞ……」

わざとらしくとぼけて見せた。

拓斗は台所のあらゆる所を探すふりをした。

いらいらするふりをした。俺はそのたびにビクビクと拓斗から姿を
はなす。

「何言ってるの。そこの棚に……あれ」

有紗の目線の先にも、スプーンはない。

「物の管理はお前にまかせたろ」

その言葉に、偽りとはわかりながらも少々カチンときた。
興奮した。

「どうして責任を押し付けるの、あたしだって疲れてるんだから」
ここ最近、緊張型頭痛が大打進をしている有紗にとって、それは間違いではなかった。

有紗の本気まじりの演技がうますぎて、一瞬クラッとした。
まるで本当に説教されてるみたいだ。

ちよつと前に、両親が口論していた。なんだかそれに似ていた。

「疲れてるものもないだろう、だったら一人でもといった場所に帰れよ」

急展開だ。

「ええ、そうします。そうする。じゃあ島谷君その女の子をよろしく頼んだから。もう戻るつもりもないから」

「ちよ、ちよつと待てよ」

最悪だ。

せっかくさっさと家を後にするという言葉を言いきったのに。

腰が砕けそうになった。

拓斗は有紗の腕を握り、階段を上って二階へ行ってしまった。

俺はそれを心配そうに見つめていたが、泣きたくなってうつむいた。

「なに何……せっかくいいところまでいったのに」

「落ち着け……ここ、屋根裏部屋あったの知ってるか」

「え……」

何故そんな話を。

屋根裏部屋へと続くはしごを拓斗が上ると、そこには布団や食料がすでにセットされていた。

「ここに全部置いてある。お前が家を出た後、すぐ俺を外に出すから。家のそばで見ればいい。そしたら俺がすぐドアを開ける。しばらくの間ここにいてほしい」

「……わかった……けどさ」

「なんだ」

有紗は小さく声をたてて笑った。

「なんの映画の主人公のつもりだよ、お前」

第三十一章（後書き）

皆様お久しぶりでございます。

最初、本当はグロ目的で描き始めたこの小説ですが。

あまりにも展開が酷く、進みすぎただでさえグダグダなものがドロドロになってしまうので、もういいです。

グロは失くしました。気が変わらなければ。

結構な間があいてしまいましたので、物語がこの先どのような展開にしたかったのかよく覚えてませんし。

なんだか二人の口調が似てるんですね、有紗と拓斗って。

そろそろ他の小説も書き始めたいと思っていますのですが、この調子で両方管理できるでしょうかね。

第三十二章

「ママ、ママは……」

「あんな奴をママと呼ぶのはよせよ、口が裂けるぞ」

「うう……」

幼き少女は、眼に涙を浮かべて。

我慢しているのだろうか、頬を雫が伝うことはなかった。

「そんなに心配か」

庵は肯定の合図を示した。

だったら仕方がないな、と優しい表情を浮かべ庵にささやいた。

「勝手に探してくればいい」

非常に残念であるが、よくあるドラマやアニメなどで囁くと聴くと、なんだか声が低く太く眠たくなるような、めまいのするような感じを思い浮かべる人もいるかもしれない。

ムードが出ていない。彼の声は残念ながらまだ幼い。

庵は家を後にした。

一人で外出なんてさせた事がないね。

なんだかちよつと楽しみだ。別に戻ってこなくてもいいと思ってる。

唯でさえ小さな子供に好奇心がないというのに、その子供のせいでパラレルワールドモドキに来てしまったというのだから。

「さ、さ……早く早く」

「う、うん……でも、気が引けるなあ。こんな薄暗い部屋にこもるなんて」

「嫌なら外でもいいと思うけど」

はいはい、有紗は閉じこもった。

ひたすら、ひたすらその薄暗い部屋に入っていた。
でもとてつもなく暇だった。

学校へ行くよりはマシであろうが。

わああつと下の階では泣き声がこだました。

なんだなんだと不機嫌な顔で近寄る拓斗に抱きついた。

「ママ……いないのお」

「そうかそうか」

不覚にも一瞬だけ温かい気持ちになった。

なんだか懐かしいの裏返しだ。

それはきつと、庵が一人で家族ごつこを実施したからであろう。

拓斗も優しく抱きしめてやった。

ああ、そうだ。俺はこの顔が見たかったのだ。

「パパあ……パパあ……」

「なあ、庵……」

拓斗はゆっくり細く小さな身体から腕をほどき、ゆっくりと見つめた。

涙をぬぐいながら庵も腕を離した。

「ママがいなくて淋しいか」

肯定。

「ママはお疲れだったんだよ。お前が……いや、その……ね」
可愛らしい顔に思わず言葉が詰まる。

「ママはこっちに来てからあれなんだよ。えっと、そう、早く向こうに帰りたいんだ」

……

「だから、イライラしてたんだよ。俺もそれは同じだと思う。もうこんなところいたくないんだよ」

……

「庵、よく考えるんだ。ここで暮らしていくか……ママと一緒に帰る道を探すか」

……

「帰らないか」

肯定。

「待ってろ、俺が今からママ探してくるからさ、もう、泣くなよ」

一方その頃、暇を持て余していた有紗は屋根裏部屋から二人のやり取りをきいていた。

なんという、どこかにありそうな洋画劇場なのだろうか。

大笑いは出来ないが、それをこらえるのは苦しい。

だんだんこっちまで熱く、恥ずかしくなるではないか。

「じゃあな、お前はもう一度外を探してほしい。きっとそろそろ帰ってくるよ」

肯定。

俺は再び外へ出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6672n/>

ノイトロバ

2011年10月7日20時02分発行